

劇症肝不全症例を経験したので報告する。

症例は生後25日男児，主訴は軽度黄疸．妊娠経過は特に異常無し．妊娠39週1日正常経膈分娩で出生，体重2930g．Apgar score 8点/1分，10点/5分．出生後呼吸苦出現，検査で肝機能異常，血小板低下，凝固機能の著明な低下認め，肝不全の診断で生後1日当院NICU搬送．連日のFFP補充も凝固機能の改善なく，次第に血中アンモニア値上昇し生後19日よりほぼ連日交換輸血施行．保存的には救命困難と考えた．原因疾患はヘモクロマトーシス，胆汁酸代謝異常症等考慮したが確診に至らず．家族より生体肝移植の希望あり，患児の父親をドナーとして2005年12月15日（生後25日，体重3480g）生体部分肝移植施行．肝臓は萎縮著明で摘出肝重量25g．外側区域の一部をグラフトとし（114g）同所性肝移植施行．血管胆管合併症なく順調に回復した．

【考察】新生児肝不全は非常に稀で原因特定困難な場合も多く救命率も低い．本邦の新生児肝移植は3例，生後27～30日で施行，1例生存とされている．本例の経過，病態につき文献を交えて報告する．

8 約28年の経過で悪性化した solitary fibrous tumor の1例

渡辺 健寛・古泉 貴久・広野 達彦
国立病院機構西新潟中央病院呼吸器外科

症例は当院初診時73歳，女性．47歳時に検診異常影で大学病院受診．右中肺野に約2.5cm大の腫瘤を指摘され，胸膜腫瘍疑いの診断．手術を勧められたが拒否．1997年11月他疾患の経過観察中偶然胸部X線で右肺腫瘤を指摘され11月当院初診．右中肺野に7cm大の腫瘤影を認めた．しかし，治療拒否し外来通院せず．1998年3月近医で胸部X線異常影の増大を指摘され当院紹介・入院．胸膜腫瘍の診断で6月腫瘍摘出術と中葉切除施行．病理診断は悪性胸膜中皮腫であった．2003年4月右前胸部痛と右前胸部膨隆を主訴に来院．再発の診断でBSCを施行し，12月死亡された．解剖所見は腫瘍の心筋転移を認め，solitary

fibrous tumor の診断であった．

9 肺腫瘍に対するラジオ波治療後に発生した難治性気胸の1例

本野 望・青木 正・土田 正則
橋本 毅久・林 純一・石川 浩志*
新潟大学医歯学総合病院第二外科
同 放射線科*

症例は71歳男性，肺癌に対する肺葉切除後の経過観察中に多発肺癌を発見された．低肺機能のため外科的治療は困難と判断され，ラジオ波による治療を行った．治療後に気胸を発生した．癒着療法を試みたが改善無く，胸腔鏡下手術を行った．焼灼部近傍の胸膜は陥没しその周囲から空気漏れが確認できた．

10 虚血性壊疽に対し術後，陰圧創傷閉鎖法を施行した1例

中山 卓・斎藤 正幸・篠原 博彦
岡崎 裕史・矢澤 正知
県立中央病院心臓血管呼吸器外科

縦隔炎や糖尿病性壊疽に対する陰圧創傷閉鎖法の有用性が報告されている．今回，虚血性壊疽の症例に対し，血行再建後，同治療を併用し良好な結果が得られたので報告する．症例は65歳，男性．左足背および外踵部の潰瘍と疼痛が出現し，ASOと診断．まず腹部大動脈-両側大腿動脈バイパスを施行したが，改善しないため右大腿-膝窩動脈バイパスを追加．さらに可及的なデブリードメントの後，-99cmH₂Oの陰圧創傷閉鎖法を併用．術後約2週間で良好な肉芽上昇が得られ，分層植皮を行い，ほぼ治癒せしめた．同方法は簡便で侵襲性が低く，かつ肉芽形成の促進に有効であると考えられた．